
ゴールデンルーザー ~優しい世界~

ミミズク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴールドン ルーザー ～優しい世界～

【Nコード】

N1917Y

【作者名】

ミミズク

【あらすじ】

かつて数多くあった世界は、いつしか交わりひとつになった。それから、五百年後の世界。そこでは、様々な種族が存在し、生活している。

これはそんな世界で生きる人々の暮らしの話である。

作者は初心者です。かなりお見苦しい文章になるかもしれませんが、頑張りますのでよろしく願います。

プロローグ（前書き）

開いていただきありがとうございます。
駄文ですが、お楽しみください。

プロローグ

簡単な事ではなかった

力無きものが生きていくというのは

障害などいくらでもあった

才能なきものが歩く道には

それでも、少年は闘った

身を削りながら、血を流しながら、心を砕かれながら
走り続けた。

傷ついた数だけ、少年は、『生』を学んだ。

地に伏せた数だけ、少年は、『闘い』をおぼえた。

涙の数だけ、『優しく』なることができた。

そして、少年は青年になり、『己』を知った。

これは、ひたすらに生き抜く、一人の優しい青年とその世界を生きる人々の日常の話である

プロローグ（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

新学年スタート ～登校前～（前書き）

開いていただきありがとうございます。
お楽しみください。

新学年スタート ～登校前～

ピピピピッ ピピピピッ ピピピピッ

目覚まし時計のアラームが春独特の澄んだ空気を震わして、東雲しのぞく流志りゅうしに朝の訪れを告げる。時刻は五時半。

流志はぐずることなく、目を覚まし、アラームを止めベットから抜け出すと、この澄んだ空気を部屋にもっと取り込むために窓を開けた。

「ふう、新しい生活の始まりにはびつたりのあさだ」

本日四月七日の天気 快晴

そう、今日は東雲 流志の高校生活二年目スタートの朝なのであった

流志は二階の自分の部屋を出ると一階に降り、洗面所で顔を洗い、意識を完全に覚醒させる。次に向かった先は一階の奥に面している兄の部屋だ。部屋の前に到着するとドアをノックする。しかし、まったく返事はない。

「修治兄さん、朝だけど〜。」

やはり返事はない。

「……これは、また夜更かしたな兄さん。しょうがない、入るよ。」

ドアを開けるとそこにはカオスな光景が広がっていた。

八畳ほどの部屋には、所せましと何かの道具やら資料やら得たいの知らない薬品のビンなどが敷き詰められて足のふみ場もない。

「げっ！　これが人の住む部屋なのか！？　また近いうちに掃除しないと……ハア。」

流志は軽くため息をつきながら、部屋の主を探す。が、修治の姿はどこにもない。

「あれ？　修治兄さん？　………ん、机に何かあるな。」

机の上には、資料とは別の赤い紙が一枚置いてある。そこに書いてあった内容はシンプルだった。素晴らしいアイデアがひらめいたので、研究室に行ってくる

「ああ、なるほど。いつもの症状が出たのね……。無理しなきゃいいけどなあ。」

ここにはいない兄の心配をしつつ、流志は部屋を後にした。つづいて、二階の姉の部屋に向かおうとしたところで、ふと足をとめる。

「そういえば、氷里姉ひりさんも合宿でいないんだっけ。父さん母さんは仕事でもう出てるだろうし……。てことは、今日は一人か。…なんか、寂しいもんだなあ。」

新しい日々の始まりに一人で朝食を食べないといけないことに一抹の寂しさをおぼえながら台所に向かう。台所に着くとすぐに朝食の準備に取りかかる。慣れた手つきでネギをきざみ、鍋のなかに放り込み、味噌をとかして味噌汁を作ると、冷蔵庫から卵を取り出しアツという間にだし巻き玉子（ちなみに、甘め）をつくる。そして、できあがった料理を皿に盛り、テーブルに並べる。なんとなくもの足りなかったので買い置き納豆も添えた。

「いただきますつと、やっぱり虚しいなあ。」

流志は黙々と食べ進めた。味的には合格ラインではあったが、いかんせん薄味な気がした。

さっさと朝食をすますと食器を片付け、学園に通う準備を始める。カッターシャツに袖を通し、学園指定の黒いズボンをはく。最後に自室から鞆を取ってくると、流志は玄関のドアを開けた。

瞬間、やわらかな風が頬をなでる。

なんとなく空を見上げ、流志はつぶやく。

「ああ、いい天気だ」

そして、流志は歩き出す。その耳にかかるほどの長さの『白髪』をゆらし、その『白眼』で前を見据えて。

新学年スタート 〱登校前〱（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

新世界の始まり（前書き）

開いていただきありがとうございます。
お楽しみください。

新世界の始まり

世界は『ひとつ』になった。

かつて世界というものは、いくつもあった。それらの世界はそれぞれ独自の発展を遂げ、様々な歴史や文化、価値観、技術などを生み出し繁栄していった。

ある世界は、なんの特性のない人間という種族が科学という力で支配者になり、またある世界では魔力を駆使し魔法が使えた。

その他にも、竜人が君臨していた獣人の世界、魔界と呼ばれる非常に厳しい環境の中で魔族が暮らす世界、霊力が当たり前に使える天界など本当にいくつもの世界があったのだ。

また、各世界に住んでいる大半の者達は自分達の今居るこの世界しかそんざいしないものと思っていた。

しかし、実際は違った。世界は数多くあり、時に『干渉』しあいながら成り立っていたにである。

この『干渉』の最たる例であり、世界が複数あることを知った者達、それがいわゆる『異世界帰還者』であった。

彼らは、召喚、転生、憑依など様々な理由で世界間を渡った。

世界を救うために『魔王』を倒す『勇者』になった者、反対に『魔王』となりその世界を支配した者、あるいは理由なく渡り旅をした者もいた。その逆、魔法世界から科学世界に渡たる者。はたまた、獣人の世界から天界へ、などというのもあった。また、元の世界に

帰ったものもいた。まあ、元の世界とは異なりすぎる力は消えていたが

そして『帰還者』の一人はある懸念をいだいた。

こんなに多くの世界はずっと共存できるのか？

そして、その懸念は最悪の形で示された。

今から約五百年前 新生暦一年 世界は大きくなりすぎ衝突し、混ざりあい、ひとつになっていった 多大な犠牲をはらって

最初は些細な変化だった。時おりちよつとした物が世界間を渡るようになった。召喚などの手続きもせず。それは力ギヤコップなど本当に大したものではなかったので、各世界の住人達は気にもしなかった。

しかし変化はしだいに大きくなる。車や船、果ては家などの建築物も渡り出したのだ。突然消失する家々や、突然現れる見たこともない異世界の乗り物を目にすれば、さすがに異変に気づき、人々は焦りだした。

そんな中、各世界の『帰還者』たちは名乗り出た。

自分達は、似たような体験をしたこと。異世界の存在。全てを、彼らの世界の住人に伝えた。現状を目の当たりにしている人々に彼らを疑う道理はない。

それから、人々は『帰還者』を中心に様々な対策を立てた。異世界の物の取り扱いかた、異世界への物の流失を防ぐ方法も研究した

魔法世界なら魔法で、科学世界なら科学で

そして、最大の問題である、『これから起こるであろう人の異世界への渡り』についても話された。

どれも明確な対策はできなかったのだが

そして遂に、人が消えた

新世界の始まり（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

新学年スタート ～登校～（前書き）

開いていただきありがとうございます。
お楽しみください。

新学年スタート　↓登校↓

人が消えてからは、暴動が起きた　と言うことはなかった。事前に可能性については知っていたし、対応策も一応はあったためだ。もちろん、世界を渡った者達は、困惑したしたが。

それでも、全体としては落ち着いていた。これは各世界共通のことだった。

世界を渡った者達も、意外なことに手厚い対応を受けた。皆、明日は我が身かもしれないという思いがあったため、『異世界人』が何らかの方法で元の世界に帰ったときのことまで考えての行動だった。これも各世界共通のことだった。

実際帰るものも出た。来たときのように唐突に。

そうこうしている内に、人々は異世界にも慣れ、渡ったとしてもなんとかなるだろう、という認識になった。

本当の悲劇はここからだった

人々が『消滅』しだしたのだ

今までの渡り時とは、明らかに違うなんとも気持ちの悪い真っ白の『光』に包まれると皆苦悶の表情を浮かべ、捻れるように消える。

最初は新しいパターンかと思われたが、どの世界から帰ってきた者達に聞いても、「こちらには来ていなかった」ということだった。

そして、知る。

これは、『消滅』なのだ

そう、消えるのだ。どの世界からも、完全に

事態は加速する

世界が混ざり始めたのだ

世界の狭間はボヤけ、大地は、海は、静かにでも確実に溶けて混ざ
る。

そして、その間も『消滅』は止まらない。一人また一人と消えてい
く。それはさながら目次録のようであり、地獄絵図のような光景だ
った。

いつしか人々はこう思うようになる。

これは、世界がひとつになるときの歪みの調節なのだ、と

そしてそれは、正しい。そうこれは、調節だった。世界はひとつに
なるために、人の数を減らしたのだ

遂に世界は完全にひとつになった。いわゆる『界合』だ。

その時、各世界の人口はそれぞれ、四分の一にまで激減していた

それから五百年程の月日がたった今、残った様々な種族の人々は悲しみを乗り越え、暮らしていた。時に手を取り、時にぶつかりながら。

流志は一人、暖かな春の日射しの中を歩く。家から学園までの道のはそこまで遠くはなく、歩いて十五分といったところだ。

歩道の脇には様々な世界原産の色とりどりの花が植えられており、流志に甘い香りを届ける。

今、歩いているこの道は花の彩りの鮮やかさから『フラワーロード』と呼ばれている。

流志はその『白眼』を細めると、花々を眺めながら今日の予定を考える。

（今日は確か、始業式の後にクラス発表をしてから、それぞれのクラスで軽い自己紹介の後に解散。っと、こんな感じだったかな？うん、それにしても自己紹介ねえ……今回はなんにもなければいいけどなあ）

流志は疲労半分、諦め半分といったかんじで苦笑した。

（まあ、なるようになるかな。それに、いつものことだしなあ、こんな状況も。）

そんなことを考えながら歩いていると、学園までの道のは半分く

らいまでできていた。周りにはちらほらと学園の制服を着ている生徒が見受けられる

そして、この生徒達の容貌や体格は多種多様だ。耳が長く尖っているエルフ族の美しい女子生徒、背丈が百七十六リール粒子の半分しかない、ズングリムツクリのドワーフ族の男子生徒。その他、黒い羽のはえた魔族、二リールを軽くこえるトロール族など本当に様々だ。

生徒達が友人と挨拶をかわし楽しそうにおしゃべりをしているなか、流志は一人きりである。それどころか、生徒達の流志をみる視線には軽蔑や嫌悪、憎悪などといった感情が込められている。

（帰りはスーパでもよつていこうか。今日は『高田屋』が安売りをしていたなあ）

しかしそんな視線には慣れてしまっている流志はなんともないよう
で、颯爽と通りすぎていく。真に残念な耐性であることは否定できない。

そんなこんなで学園 正式名称『都立海南創華学園』略して海創
に到着。無駄に豪華な校門をくぐり、これまたでかくて豪華な
体育館を目指す。

淡い花の香りがした

振り返ると、そこには見知った顔があった。

「流志くん、おはようございます。いい天気だね！」

どこまでも優雅に朝の挨拶をする女子生徒の名前は神谷凜かみやりん

流志の数少ない友人のひとりだ。

「ああ、おはよう。本当に気持ちいい天気だね、神谷さん。」

すると凜はその綺麗な眉をよせ、少し頬をふくらました

「もうっ！ 名前で呼んでって言うているでしょう！」

対する流志は苦笑をもらし

「ああ、うん。俺も名前で呼びたいのは山々なんだけどねえ。
そうしちゃうと、いろいろ大変なことになりそうだから。」

「っ！ そんなこと気にしないでよ！ あんなのはほっとけばいいのよ！」

「そうは言ってもね、なかなかどうして大変なんだよ、いろいろと。」

（まあ、俺に原因があるっちゃ、あるんだけど）

神谷 凜は女神だ。これはなんの比喻でもなければ、「冗談でもない。まぎれもない女神なのだ。」

天界に住んでいた種族である『神人』のなかの『女神』^{ヴィーナス}の末裔のひとり それが彼女である。

女神は例外なく皆眉目秀麗なのだが、凜の美しさは明らかに次元が違う。

つやのある黒髪は腰の辺りまでのばしている。切れ長でそれでいて

優しい瞳は黒く澄んでいて吸い込まれそうだ。鼻筋はすつとすきとおっている。その柔らかそうな唇はうす桃色に染まり、見るものを悩ませること間違いない。

ひとつひとつのパーツだけでも素晴らしく綺麗なのに、それらを黄金率とはかくや、といえるほど完璧に配置したその容姿は、綺麗を通り越して神々しい。

それだけでも注目の的なのに、二年で生徒会長という文武両道で人格も良く、人当たりもいいとくれば人気の程は推して知るべしであり、ファンクラブなど当たり前前のようにある。

そんな凜と流志が仲がいいというのはあまり好ましいことではないといえる。まあ、その原因は流志にあるのだが……………

「私は気にしないよ。流志くんは流志くんだもん！」

流志の顔に、ほんの少しだけ影が射したのがみえたのだろうか、凜は笑ってそう言った。

「……………ありがとう。ああ、そろそろ時間だ。行こうか……………凜。」

流志はお礼の意味を込めて名前を呼んだ。

凜の反応はというと

「……………あっ、あああああ、うん。そ、しょうだね。流志くんッ！」

なんとなく、何かがまるわかりなものだった。

新学年スタート ～登校～ (後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

新学年スタート〜始業式〜（前書き）

開いていただきありがとうございます。
お楽しみ下さい。

新学年スタート〜始業式〜

「う〜ん。いつみても無駄だよなあ、この豪華さ。もっと他のことにまわせばいいのに。」

「私もそう思うけど、この都市一番の学園だし、それなりのものにしてないといけないんじゃない。面子やプライドもあるからね。」

「まあ、それはわかるっちゃわかるけどさ。」

そんなことをつぶやく流志と凜が今いる場所は、体育か前だ。始業式のために集まった学生達が入ろうとして込み合い、列をなしている。

流志と凜もその列に並んでいるのだが、彼らの周囲に人はいない。列の前後の者でさえ、大体二リールは離れたところから、時おりちらちらと二人を見るだけである。

理由は簡単で、それは二人の異質さにある。凜はその美貌に加え、文武両道、生徒会長までこなすといった超完璧美少女なのだ。纏っているオーラもそうとうなもので、そこいらの学生では声をかけることさえ難しいものがある、らしい。まあ、凜についていろいろと詳しい流志にとっては、なんだそれっ、といったところなのである

だが、そんな凜のオーラうんぬんよりも周囲を遠ざけている原因はやはり流志にあると言えるだろう。流志の存在というのはこの世界において好かれるものではなく、恐怖、軽蔑、憎悪の対照になつてまう。『白髪』『白眼』は神世界の誕生の象徴であり、五百年前の悲劇の象徴でもあるのだ。五百年たって、悲しみは薄れたといっ

ても負の感情というのなかなか消えるものではない。実際、今ちらちらと流志をみる視線にもそんな感情があらさまにみてとれる。口には出さないが決して近づきたくないというのが本音だろう。

そんな二人が、並んで楽しそうに話しているのだ。それはもう、彼らの周りに絶対防御壁を築いているようなものである。まあ、そんな事を気にしない者も極少数ではあるがいるにはいるのだが……

(……俺がどう思われるかはそこまでの問題じゃないんだけど、凜の評価にも関わるかもしれないし、難しいところだね)

流志が凜のことを名前で呼ばなかったりするのはそういう問題を懸念してのことである。凜は気にしないとってはいるが、実際凜の周りの人々からは流志との付き合いをやめたほうがいいという声も上がっている。

もっとも、凜はそのことについて憤慨しているようで、さっきみたいにトゲのある感じでかえしているようだ……

「え、ねえったら！ 流志くん！ 聞いている？ もう入り口に ついたよ！」

「ごめんごめん。ちょっと考え事しててね。」

「もうっ！ 話しかけても全然反応しなくなるんだもの、無視されてる、かと……」

「違う違う！俺が凜の事無視するわけないよ」

自分で言っただけなのにショックを受けたのか、徐々に青ざめ目に涙をため始めた凜に、慌ててフォロースする流志。

「本当に？無視とかしてないのね？」

「もちろん、当たり前でしょ。」

「よかったあ。流志くんは無視されたら私……」

「いや、だからそんなことないって！なにこの無限ループ！」

またもや自分の発言に落ち込む凜をなだめすかして、流志は体育館の中にはいる。中の様子は外見にたがわず豪華そのものであった。一万人以上は軽く入るであろう体育館の細部にいたるまで素晴らしき装飾がほどこされ、まるでお城のようだ。舞台上にある講談用の机も魔界区特産の『魔木』を使っていて、明らかに高級品だというのがわかる。

正直言ってこんなに高級品やら凝った装飾などがある場所で運動など、気をつかってできるわけがなく、体育館の意味をなしているのが甚だ疑問である。

「それじゃあ私、準備があるからそろそろ行くね。」

「ん、ああ。そういえば神谷さんは生徒会長挨拶があったね。頑張っつてー！」

「そうなの。まあ新入生の入学式のとくに一度やっているから、平気なんだけどね。ていうか流志くん、また名字で呼んでるっ！」

「いや、人が大勢いるし。」

流志は人目が多いところやでは、凜のことを名字で呼ぶようにつとめている。これは、凜の評判などへの配慮である。まあ、さっきのように凜が落ち込んだりのをなぐさめたり、動揺したのを落ち着けたりするときはべつだが。

「もうっ！だからそんなこと気にしないでっっていつてるのに！だいたい皆、流志くんのことを何にも知らないのに偏見だ」

「ああ、分かったから。もう時間ないから早く行って、行って！」

このままでは、らちがあかないと思った流志は凜の話をぶった切り、舞台そでの先生方や生徒会役員が集まっているところに早く行くように急かす。

「ああっ、まだ話し終わってないのに！」

流志はぐずる凜の背を押して、集合場所につれていった。凜は渋々であったが時間はないのは本当のことだったので、なんとか納得してくれた。

凜を送り届けた流志は、体育館全体を見渡す。そこには、一、二年生のほぼ全てである三千人程度（一学年千五百人ほどいる）の生徒がいた。ちなみに、一年生は今日は休みだ。

（……まだ皆は来てないか。まあ皆自由な人だからなあ）

流志には友達は少ないが、居ないわけではない。どんな苦しいときも支えあい、背中を預けられる親友が四人いる。一癖も二癖もある者たちだが、共に笑い、共に泣き、共に闘ってきた最高の仲間であ

り、その絆は鋼のようにかたい。
ちなみに、そのなかに凜ははいつていない。凜との関係はまた別である。仲がいいのは確かだし、凜にしてみればその先……

流志は親友たちがいないことが分かると、空いている席を探し、腰を下ろした。

ピンポンパンポン　これから始業式をはじめますので生徒の皆さんは席についてください。

放送部の人だろうか　人混みのせいで詳しくはみえないが　とても綺麗な声が響いた。すると、ガヤガヤと立ち話をしていた生徒達も話をやめ、それぞれ空いてる席に座った。

まずは学校長挨拶です。マリウス・ウィンター校長先生お願いします。

その名前を聞いたとき、流志はものすごくどんよりした顔をしたが、見ているものはいなかった。

マリウス校長はツカツカと舞台上に上がり、机の机に置いてあるマイクの高さに調節すると、一言

「学生諸君、今を楽しみなさい！！！！以上！！」

そう言いきった。ドヤ顔で……

（全くあの人は、自由すぎるといっつか、なんといっつか……いや、考えるだけ無駄かな）

流志は諸事情によりマリウス校長とは面識がある、かなりの回数で。

とまあ、普通の学校では長くて眠たくなる子守唄のような校長先生挨拶は、たった一言という真にスピーディーにすまされた。

生徒にとってはありがたいことこの上ないが、一つの学校を背負って立つ者としてはひじょく微妙な感じである。

それから、一つ二つ都市教育庁代表やら何やらの挨拶を終え、いよいよ生徒会長挨拶の時がきた。

凜はその美しい黒髪をなびかせ、その名にふさわしい凜とした態度で舞台上にあがる。その姿はまさに絶世の美少女で、学園じゅうの視線を一身に集めている。

「みなさん、おはようございます。本日は天気にも恵まれ、あたらしい一步を踏み出す私たちを祝福しています。これから、一年間楽しいことばかりではないかもしれませんが、しかし、私たちには素晴らしい仲間がいます。頼れる先生方もいます。辛いことも、苦しいことも、楽しいことも、嬉しいことも、皆で分かち合い、実り多い素晴らしい一年間にしましょう。生徒会長、神谷 凜」

完璧ともいえる挨拶を、これまた完璧な礼で締めくくった凜は、黒髪を揺らして舞台上から降りた。その間生徒達はおろか、先生の中にも何人かはポーツと凜を見つめていた。

一方流志はもちろん美しさには見とれたが

（こういった場面だと本当に完璧なのになあ……。これなら、ファンクラブができるの納得だね。普段の甘えん坊や駄々っ子の感じと

はおおちがいだ。」

少しだけ苦笑をもらしながらそんなことを思っていた。

――

始業式もどこおりなく終わり、凜と二人でクラス分けが張り出されているボードの前に流志はいた。

「俺は2ーDか。神谷さんはどこ？」

「私も2ーDだ！うれしい！今年は流志くんと一緒にクラスだ！」

「うんうん、俺もうれしいよ。これからもよろしく！それに、アイクも同じクラスみたいだし！」

「え〜。アイク君もいるの？ あんなの女の子の敵じゃない。邪魔なだけよ！」

流志は凜のあんまりな発言に、親友をフォローしようと思いつきかけたが、内容がかなりの的を得ていたため、フォローを諦め、ため息をひとつ漏らした。

「まあ、とりあえずクラスに行こうか。」

クラスに着くと、席は自由のようで二人は左隅の席に座った。隣同士で。

あれほど凜の評判を気にしていた流志が何故こうもあっさりOKしたかというと、承諾しなければ凜がスネ承諾するまで駄々をこねるのは分かりきっていたからだ。……名字で呼ぶのは凜がスネないギリギリのラインなのだ。

二人で談笑していると、外から騒がしい声が聞こえる。

「……来たね。」

「……………そうみたい。残念だけど。」

ガシャン

「だあー！始業式終わってやがる！」

流志の親友のひとり、『プレイブッルジャー』『勇者』アイク・クロス・ダウンナーが現れた。

「あんた、邪魔よ！アイクの側によれないじゃない！」

「はんっ！そっちが邪魔でしょうが！アイクもアタシの方がいいに決まってるわ！」

「まあまあ、二人とも落ち着いてくださいます。皆でアイク様をシエアすればいいんですわ。」

「ああ、それボクもさんせい！」

女の子を四人も引き連れて

新学年スタート〜始業式〜（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

新学年スタート〜自己紹介〜 (前書き)

聞いていただきありがとうございます。
お楽しみ下さい。

新学年スタート〜自己紹介〜

「いつつ私とアイクの邪魔ばかりするの止めなさいよ、アンタは！！」

「それはアタシのセリフだよ！だいたい、つい最近アイクの魅力に気づいた新参者のくせに！」

「愛に時間は関係ないのよ！大事なのは気持ちよ、気持ち！私とアイクの愛は海よりも深いのよ。アンタはお呼びじゃないの！！！」

「んだと〜、やんのか、コラ！」

「まあまあ、お二人とも落ち着いてくださいませ。ひとまず、紅茶でもお飲みになりませんか？今日は、最高級のブラック・リリアを持ってきましたのよ。」

「ああ〜、ボクも紅茶飲みたい！」

「もちろん、あなたの分もありますわよ。」

「やったー！ちなみにお茶請けとかもある？」

「『フェアリーカフェ』の妖精クッキーをよいしています。」

「やった、やった！ボク、あのクッキー大好きなんだよね〜。」

「そういうことなので、どうですかお二人とも、ひとまず休戦ということにしては？」

「いやよ(だ)、今日という今日は……」

「アイク様はどうしますか？」

「ああ、俺もちょうどなにか飲みたかったところだ。」

「それでは、あちらの二人はぬきにしてお茶会でもしましょうか。」

「「ちょっと、待った!」」

「どうしました？」

「「^{アタシ}私も混ぜて(ろよ)！」」

「喧嘩は……」

「「休戦します!」」

そんなこんなで、話しがまとまったのか机を五台ほどくつつけてひとつの大きなテーブルにすると、どこからともなく取り出したポットでお湯を沸かし、紅茶をいれる。そして、これまたどこから取り出したのか今話題沸騰中の洋菓子屋『フェアリーカフェ』の妖精クッキーを皿にのせ、一人ひとりに配る。

そして、にぎやかなお茶会が始まった

教室のど真ん中、それも一時限目の授業中で

ちなみに、クラス担任であるミア・カーティス 二十五才、独

身 はずつと前から来ているが、アイクたちのこのような奇行は去年からのことなので気にせず、新年度の授業の進み方や、上級生としての心構えなどを語っている。また、他の生徒も同じな様で、まったく気にもせず先生の話しに耳を傾けている。

「カオスだ……」

「^{カオス}下雄ね……」

流志はこれでもかというぐらい顔を引きつらせ、親友とその取り巻きの周囲の目をまったく気にしない自由すぎるスタンスに、盛大に頭を抱えた。

一方、凜は流志の言葉と響きはまったく同じであるが、アイクへの呆れや軽蔑を多分に含んだ新しい造語を呟く。実際、アイクを見ている凜おの瞳はものすごく冷めたい。というか極寒である。その美しさと相まって非常に怖い。

一通りアイクを冷めた瞳で睨み付けたあと、ひとつ息をはき気をとり直すと、流志の方を向き訪ねた。

「前から思ってたんだけど、流志さんとアイクくんってどうして親友になったの？流志くんはアイクくんと違って誠実だし、性格もあんまり会いそうにないんだけど……」

「うーん、まあ神谷さんの言いたいことは分かるけど……俺とアイクは拳で語り合った仲というか……。これは言ってもいいのかなあ……」

「いや、言いにくいことならいいの。っていうかごめんね。ちょっと私アイクくんに失礼なこと言っちゃったね。」

流志がかなり言い渋っているのをみた凜は、これは本当に言いにくい類いのことだと感じ、話を切るうとする。自分の発言の反省を添えて。

「いや、別に言いにくいってほどのことじゃないんだけど。ただ、こんなに大勢の人が居るところだと、騒ぎになっちゃうかもしれないんだよねえ……」

かなり思わせ振りの態度でうんうん唸っている流志を見ているうちに、また興味が湧いてきた凜は耐えきれなくなり、身を乗り出して流志に迫る。

「もう、そんなに焦らすぐらいなら教えてくれないじゃない！流志くんのイジワルッ！」

不意に凜の整った顔が近づいてきたので、ドキッとした流志は、少し顔を赤くして視線をそらしながら返事をする。

「ああ。うん。じゃあ、ヒント、というかまあこれがほぼ答えでもあるんだけど、とりあえずほんのさわりだけ今は教えておくよ。後はまた次の機会にってことでいい？」

「いいよ、それで。一応ここで話したら騒ぎになるんでしょう？流志くんが言うことだから本当のことなんだろうし、それに後で話してくれるんなら問題ないよ……それに秘密の話をするなら二人きりになれるかもしれないし……」

最後の方は非常に声が小さかったので流志は聞き取ることができなかった。

流志が首をかしげ少し困惑した顔で自分を眺めていることに気がついた凜は慌てて、じゃあヒント頂戴、ヒント、と話しを戻しにかかった。

かなり不自然な凜の態度にもう一度首をかしげた後、まあいいか、と考えることを止め、凜にヒントを告げるために耳元へ顔を近づけた。

「ヒントは三年前の『愚連隊壊滅事件』だよ。」

「……………」

「ん？あれ？神谷さん聞いている？」

「……………」

顔の前で手を振ってみるが反応がない。どうやら、凜は流志が急に耳元にと来たことで固まってしまったようだ。目の焦点は微妙にずれ、頬はリンゴかなにかのように赤く染まっている。そしてその表情はどことなく幸せそうである。どうやら自分からやるのは平気だがやられてしまうのはダメなようだ。

今度は肩を揺すってみることにした。やはり反応がない。このままでは話の続きができないので、流志は奥の手を使うことにした。

少しだけ声を大きくして、周りの生徒にも聞こえるように流志は喋りだした。

「中学三年生のころ、街角で女の子が悪漢に襲われているのを見て助けたけど、実はそれは映画の撮影で、しかも事情を説明しようっと近寄ってきたイケメン俳優の獅子峰 条をボコ……………」

「いやあああ！！流志くんストロープ！」

固まっていた凜は自らの失敗談を流志が語り始めると徐々に意識を覚醒させ、ついさっきまでとは違った意味で顔を真っ赤にして、ものすごい速さで流志の口を塞いだ。

「むぐツ 凜ツ 鼻までおさえてる！息ができないツ！ そろそろちよつとヤバイ感じになってきちゃった……。あれ、何だか綺麗な川が見えるなあ。あつ、お花畑もあるや。そういえば兄さんが新しい薬の開発に必要って言ってた花もありそうだ。渡っちゃおうかなあ……」

「ああっ！ごめんなさい流志くん！大丈夫？」

「あはは。大丈夫だよ。あつ、今度は舟が来たみたい。えっ、お金を払わないと乗せてやらないって？そこをなんとかお願いしますよ。今持ち合わせがなくて。後でお支払しますから……」

「わーっ！ダメダメ！流志くんその舟にのつたらダメよ！！っていつかツケで支払おうってどうなの！！」

焦りのあまり凜に鼻と口の両方を押さえられ息をすることができない流志は、どうもあつちがわの世界へ旅立とうとしていた。それに気づいた凜は慌てて手を離し流志の様子を気遣うが、流志は虚空を見つめたまま、一人ぶつぶつと訳の分からないことを呟いている。

「帰ってきて流志くん！」

ペシペシ。流志の意識を取り戻そうと凜は流志の両頬をたたいた。

「あれ？どうしたんだる俺？なんかさっきまでものすごく綺麗な川と花畑があった気がするんだけど。」

凜の意識を覚醒させるはずが、自分の意識がバイバイしそうになったという、ミイラ取りがミイラになる典型的な例になったしまった流志であった。まあ一応、凜の意識は帰ってきたので目標は達成した訳だが……。

「まったく、神谷さんは完璧なのに時々こんなドジするんだからなく。口を押さえようとして鼻まで押さえるなんてねえ。」

そう、神谷凜という少女は少しではあるがドジッ娘の気があるのだ。例えばさっきの流志の話の落ちを言うと、近寄ってきたイケメン俳優の獅子峰 条さえも悪漢と勘違いしてしまいボコボコにしてしまい、少女を連れてその場から逃走したのだ。その後、少女から事情を聞いた凜は少女と一緒に撮影隊のもとにもどり、皆に謝ったのだ。凜にとっては非常に恥ずかしい思い出である。

「うう、ごめんなさい……」

「いやいや、そんなに気にしないで。俺は大丈夫だし、いきなりあの話をした俺も悪かったからね。おあいこってことでどうかな？」

「……う、うん。そうね。…それじゃあ話を戻すけど流志くんとかイクくんはあの『愚連隊壊滅事件』で知り合ったこと？イクくんの事は聞いているけど流志くんも関係してたの？」

「まあね。詳しいことはまた別の機会に話すけど、だいたいはそのなかんじかな。そこで俺はイクのことを知って、親友になったっ

てわけ。」

「なるほどね。あんな大きな事件で二人は親友になったんだ。」

「そうなんだ。それにアイクは凄く義理や人情にあついし、困っている人を見捨てない優しさだってあるんだよ。まあ、だから女の子が集まってしまっただけど……。あとアイクのあの優柔不断というか女好きというような性格や態度にも理由があるんだ。」

アイクのことを語る流志の表情はとても穏やかかで、その顔からはアイクに対する確かな信頼と強い絆がうかがえる。

そんな流志の姿をみて、凜は少しだけモヤモヤした気持ちかわき出てくるのがわかった。自分の知らない流志の過去をアイクが共有していることに、そして自分ではなくアイクに向けられた厚い信頼に嫉妬したのだ。

もちろん凜にだってこれが親友どうしの友情だとは理解しているし、流志のことを理解してくれる人がいるのは嬉しい。しかし、流志に恋する一人の乙女的心情としては、どんな好意的な感情であっても自分に、いや本当は自分だけに向けて欲しいのである。これは凜だけではなく全ての恋する乙女に言えることであろう。

そんな凜のふくれている様子をどことなく感じ取った流志はアイクについての話を打ち切り、どうしたの、と凜に尋ねた。

「ううん。何でもないよ。ただ、ちょっとアイクくんの事が三割ましくらいで憎くなった気がするだけ……。まったく、ハーレムだけでは飽きたらず流志くんからも信頼されてるなんて、もうヤッチ

やおつかしら。」

「ええっ！？俺、アイクの良いところ言っただけだったのに好感度が下がっている！」

「冗談だよ。本当はアイクくんを少しは見直したよ。」

「ああ、冗談ね。よかった、安心したよ。」

「今では生き物と認識できるまでにはなったかな。」

「そのレベルで認識改善されても！」

「ちなみに前は路傍の石、いや路傍のゴミだと思っていたけど。」

「意外と改善されてる気がしてきたっ！」

流志が毒をはき続ける凜に律儀にツツコんでいると、教卓の方からミア先生の一大きな声が聞こえてきた。

「は〜い皆さん、少し静かにしてください。新しいクラスになって嬉しかったり、新しい友達を作りたいのは分かりますが、これから新学年最初の授業恒例の自己紹介タイムに入りたいと思います。各自、自分の好きなものやチャームポイント、なんでもいいのでクラスの間にもアピールしちゃいましょう！」

ミア先生の言葉ににわかにソワソワし始めるクラス。皆、こちらから一年を共にする仲間にいい印象を与え、なおかつでしゃばりすぎない紹介文を考えているのだろう。しかし、まったくそんなことを気にしていない生徒も何人かはいる。

凜や流志、アイク一行である。凜は生徒会長という立場上こんなことは慣れっこなのだ。まあ、アイク一行はまだお茶会の途中であり先生の話聞いていなかったようだが。

そして流志はというと、かなりの不安を感じ、眉間にシワを寄せていた。もちろん自分に対する侮蔑や嘲笑のことではない。その後が問題なのだ。去年の自己紹介の時は、クラスメートの流志へのあからさまな態度にキレたアイク（アイクとは去年も同じクラスだったが、特に流志に絡んでいた何人かのガラの悪い生徒を放課後呼び出し、ポコポコのギツタギタにしてしまったのだ）。

今回はそうならないことを切実に願う流志は、どうしたもんかと考え込んでいるのである。しかしこればかりはどうしようもなく、流志には穩便に済むように祈るしかない。

そんな流志の考えをよそに自己紹介はスタートしていった。どこに座るかは自由であるため自己紹介の順番は座席順である。右端の先頭の生徒からのようなので、流志は一番最後である。

それぞれ、自分の長所や趣味をできるだけ明るい調子で語っていく。これといった大きな事もなく順調に進んでいる。そして、中盤まで進みアイクとその一行の番までやって来た。流志は無理かもしれないけどできれば何もなければいいなあ、と半ば諦めの入った気持ちで耳を傾けた。

「んっ、なんだ自己紹介か。ええ〜と、知ってるやつも結構いると思うけど俺の名前はアイク・クロス・ダウンナーだ。一応『勇者』だ。いろいろと迷惑かけるかもしれないが一年間よろしく頼む。…ああ、後同じ学年の東雲流志に手をあげるヤツは許さないのだから。こんところよろしく。」

流志も同じ教室にいることに気づいていないのか、本人の目の前で

は決して言えないであろう恥ずかしいセリフを言ったのけたアイク。クラスの反応は正直言って微妙だ。『勇者』で人望もなかなか厚いアイクの言葉には耳を傾けたいが、流志の事は受け入れがたいといったところであろう。

そして、流志の反応も微妙である。こんなに大勢の前であんな宣言をされてしまったては余計に風当たりが強くなってしまふのだ。とはいえ、自分のことを考えての行動ということは理解しているため嬉しくないといえれば嘘になる。ゆえに流志は苦笑を浮かべるしかなかった。

そんなクラス全体の微妙な空気を感じ取ったのかミア先生はアイクの周りに陣取っているメンバーに順番をまわす。

「私はカナメ・キャンベル『魔女』よ。得意なことは燃やすこと。まあ、周りからは『紅蓮の魔女』なんて呼ばれているわ。アイクの敵やアイクに害するヤツがいたら跡形も残さず燃やしてあげるからよろしく。」

「アタシは鬼瓦おにがわ 湊みなとよ。これから一年間よろしくお願いします…だわ。…あれ？おねがいしますわけ？…ああもういいや！とりあえず一年間よろしく！アタシは、見てわかるところで『鬼族』だ。自分で言うのもアレだけどかなり強いぜ！」

「まったく、湊さんったら言葉遣いが乱れてますわよ。…失礼しました。私は、リリアナ・S・イスピニアですわ。いろいろとご迷惑お掛けするかもしれませんが、一年間よろしくお願いいたします。後、何かお困りのことがあったら私にご相談を。イスピニア財閥がどんな問題でも解決してみせますわ。」

「じゃあ、最後はボクだね！ボクの名前はミミ。ボクは『獣人族』」

のなかの『野兎族』だよ！趣味は、食べることかな！美味しい物つて本当にスゴいよね！美味しいものは人を幸せにできるし、笑顔にできる！食が一番！」

四人は思い思いに自己紹介をしていた。様々な種族が入り乱れ、かなり個性的なクラスにおいても、このメンバー（アイクと四人のハーレム要因）はかなり存在感がある。

アイクと四人の自己紹介も終わり、クラスの半数の自己紹介がすんだ。残りの生徒たちも次々と自分のアピールを済ましてゆく。しばらくすると凜の順番となった。

「神谷凜です。一年間みなさんと楽しく過ごしていけるよう生徒会長としてもいちクラスメートとして頑張るので、よろしくおねがいします。特技とかは、特にはないですが一応武術の心得はあります。」

挨拶をする姿ですら絵になるものだと思隣の流志は心の底からそう思った。決して大声ではないのだが透き通るようなアルトボイスはクラス中に響き、その微笑みは種族や性別に関係なく魅了している。これは凜の次に自己紹介をする人はいかかわいそうだ。皆凜の自己紹介の余韻にひたっているためしばらくはどんな話も耳に入らないだろう。

さらに順番は進み遂に流志の番がやって来た。なごやかだった空気が少し冷たくなった気がする。アイクの発言もあり、表だって自己紹介の妨害や、流志への暴言を吐く者はいないが、好意的に感じていない者も多そうだ。流志はひとつため息をつく、穏やかな声でしゃべりだした。

「ええ〜つと、東雲流志っていいいます。皆とは仲良くやっていけたらいいなと思います。特技はありません。一年間よろしくお願ひします。」

流志の自己紹介は実にシンプルだった。だがそこには自嘲も自分を嫌っている者への怒りや拒絶も無かった。流志は自分に誇りを持っているし、差別的な考えは仕方ないことだと分かっている。そしてそれは分かりあえることだということも。故に、自分から積極的に拒むことはせず、怒りをぶつけることもない。……最も自らの矜持や仲間が傷つけられそうになったときは別だが……。

と、流志の自己紹介が終わった瞬間

「ああー！ このクラスだったのか流志！ やったな！ 今年も同じクラスでうれしいぜ！ ってそっぴや俺さっきお前が聞いてるとも知らずあんなこと言っちゃまったよ！」

「今ごろ気づくって、アイク……。まあ、大丈夫だよ。あの『東雲流志に手をあげるヤツは許さない』のでそこんところよろしく」っていうセリフは俺の心の中に大事にしまっておくよ。」

「だあー！ だからそれを言うんじゃないよ！ しかもいい感じにまとめようとしてるがニヤニヤをかくしきれてねえよ！ お前絶対からかってるだろ！」

「そんなことはないよ。」

「目をそらしながら言うな！ そしていいかげんニヤニヤをやめろっ！」

二人のやりとりにクラス中から笑いがもれる。流志のことを嫌っている生徒も笑っていた。

……そんな中でカナメは流志に冷たい視線を送り続けていた。

クラス全員の自己紹介も終わったので、少し詳しく凜やアイクについての紹介をしよう

『かみや神谷 りん凜』

種族は『ヴァーナス女神』である。女神は例外なく美しいが凜の美しさは格別だ。肌は純白で、腰まで伸ばした黒髪とコントラストをなしている。少し切れ長の黒い瞳はどこまでも澄んでいて、覗きこめばすいこまれてしまいそうだ。鼻は高めで鼻筋はスツと通っている。そこから少し視線を下に下るせば、ぷつくらと柔らかかそうな薄桃色の唇がある。一つ一つのパーツですら美しいのにそれらを黄金率を体現したように配置したその容姿は綺麗を通り越して神々しい。またプロポーションも完璧と言える。身長は170リール。大きすぎず小さすぎない胸は形のいい美乳である。腰はキュツとくびれていて華奢な感じを受ける。

これだけの美貌に加え、文武両道、品行方正、人当たりもよく、二年にして生徒会長とくればその人気は計り知れない。

『アイク・クロス・ダウンナー』

種族は五百年以上前に世界間移動により誕生した『勇者』である。この学校の超有名人であり、問題児でもある。とにかくやることなすことが規模が大きく、この街で起こるほとんどの事件には関係し

ていると言っている（流志もそのほとんど全てに参加しているし、流志のおかげで解決したものも多いのだが…）。だがしかし、その自らの正義を貫く姿勢や人情に篤く、弱いものの為に戦う心意気、それに加え持ち前の明るさもあり、皆からはかなり慕われている（特に女子）。ただ、一つ難点は女好きで優柔不断ということだろう。これには一応理由はあるが……。

身長は流志よりも高く180リールある。無駄なく筋肉のついた引き締まった体は芸術の域に達している。

容姿はというと、男子が殺意を抱くほどのイケメンだ。サラサラの金髪は肩口で切り揃えられ、光を浴びればキラキラと輝くようだ。瞳の色は碧色。その姿はまさに王子さま、もしくは何かの物語の主人公といったところだ。

『カナメ・キャンベル』

種族は『魔女』。魔女界では期待の新星とされ、かなり噂になっている。実際の実力も高く彼女の火炎魔法の強さとその赤髪をあわせて『紅蓮の魔女』という二つ名をすでもっている。

少し目元がキツいが容姿もなかなか整っている。特徴的なのはルビィのような紅い瞳と赤髪である。

背格好は身長160リール前半で、スツと引き締まってはいるが、でるところはきつちりとでている。

アイクに惚れている。

『鬼瓦湊』

種族は力が強く好戦的な『鬼族』であり、昔は超がつくほどの不良で、広域レディース『苦偉畏武頭』の総統をやっていたほどだ。現在は引退して、女らしくなるためにリリアナに弟子入りしている。が、成果のほどは今一つのようなのである。

こちらも容姿のレベルは高い。気の強そうな眼に八重歯がポイントになっている口もと。そして、鬼族特有の二本の角も彼女の魅力だろう。

身長は170リール後半はある。スラツとした体格だが若干起伏にとぼしい。

アイクに惚れている。

『リリアナ・S・イスピニア』

種族は『サキュバス』でリリアナ財閥社長の一人娘。リリアナ財閥はこの世界の一般的な移動手段である魔科学自動四輪車の世界シェアの40パーセントを占める大財閥だ。その財力は計り知れない。サキュバスらしい妖艶な魅力を持っている。アイクのハーレムメンバーの中でも断トツに女らしく、胸もかなりのサイズである。アイクに惚れている。

『ミミ』

『獣人族』のなかでもウサギの特徴を持つ『野兎族』だ。他の三人とは違いこれといって特筆すべきことは無いが、幼い容姿と148リールしかない小さな体躯、それにウサ耳も相まってマスコットのような雰囲気醸し出している。また、見かけによらず大食いである食家だ。

容姿はすでに述べたように非常に童顔であるため綺麗よりはかわいいいが似合う。体型も幼児体型だ。そしてウサ耳が特徴だ。アイクに惚れている。

最後にミア先生が締め挨拶をして、この日の授業は終わりとなった。授業が終わるとすぐにアイクは流志のもとへとやってきた。

もちろんハーレムメンバーを引き連れて。

「よう親友！あらためて言うが、お前と同じクラスになれてうれし
いぜー！」

「俺もうれしいよ。これから一年よろしく！」

「ああ、よろしく！ つつても俺の方が世話になりっぱなしだけど
な。」

「そんなことは気にしなくていいよ。俺たち親友だからね。」

「……ありがとな。ところでこれからこいつらと一緒に飯でも食い
に行こうと思ってるんだが、お前と凜も一緒にどうだ？ 互いに親
睦を深めようぜ！」

「ああ そういえばまだ挨拶もしてなかったね。ごめんごめん。こ
んにちわ。キャンベルさん、鬼瓦さん、イスピニアさん、ミミさん。
これから一年間同じクラスメートとして仲良くしてください。」

アイクとの掛け合いが楽しかったために四人に挨拶しなかったこと
を謝り、笑いながら仲良くしていきたいという旨^{むね}を伝える。

「いやいや、今さらそんな水くせーこと言うんじゃないよ！ 今の
アタシがあんのもアタとアイクの助けがあつてこそだからな、ア
ンタには感謝してるし、尊敬もしてんだぜ！」

「そうですね、東雲さん。私も東雲さんにはいつもお世話になって
います。それにあなたが素晴らしい方だということは重々承知して
おりますわ。こちらのほうこそ、よろしくお願いしますですわ。」

「そうだね。リュウくんの作る料理って本当に美味しいからね。美味しいものを作る人に悪い人はいないってね！ こっちこそ一年間よろしくだよっ！」

湊、リアナ、ミミ三は者三様に流志に挨拶を返した。流志の人柄を知っている三人には嫌悪の感情などはなく、流志に対し一人のクラスメートとして純粋な好意を抱いているようだ。

このまま和やかに話が進むと思った矢先、それは起きた。今まで黙っていたカナメが口を開き

「私は反対よ。こんな奴と一緒にご飯を食べるなんて嫌に決まっているでしょう。」

流志を冷たい視線で睨みながらそう言いになったのだ。

「おい、カナメ！そんな言い方はないだろう！」

「どうしてこんな奴をかばうのよ！こいつ、アレじゃない……」

楽しげな雰囲気が一瞬にして霧散した。凜は怒気をかなり含んだ眼でカナメを見つめ、拳を握りしめている。これがもしアイクの仲間でなければ殴りかかっていたかもしれない。アイクはアイクでカナメを注意しているが、聞く耳を持たず困っているようだ。残りの三人はなんとも言えない表情をしている。

しかし、とうの本人である流志は落ち着いている。何度も言うようだがこんなことは慣れている、故に怒りだすことでもない。これからの態度で誤解や偏見は解いていけることはもう知っている。

それに、カナメの気持ちも分からなくもない。自分の好きな人が、皆からいい印象をもたれていない流志とつるむのが心配なのだろう。そしてこれは流志の知るところではないが、嫉妬もある。アイクが流志にむける信頼の感情が羨ましかったのだ。

そう、恋する乙女は凜だけではないのだ

流志は凜を落ち着けるために、凜にだけ聞こえる小さな声で語りかける。

「凜、落ち着いて。俺は大丈夫だから。それにキャンベルさんとはまだ話したこともないから偏見があるのは仕方ないよ。」

「でも……」

「それに言ったでしょ。こういう問題は俺自身で解決していかないといけないんだって。」

「……………わかった。」

「ありがとう、凜。」

(……………本当にありがとう)

あまり納得していない凜の表情に温かいものを感じた流志は心の中でもう一度感謝する。

「それじゃあつと。ええ〜つと、キャンベルさんはどうして俺の事が嫌いなのかな？」

「あんだそれ、本気で言ってるの？ 自分の存在を考えてみなさいよ！ アイクは親友って言ってるてるみたいだけど、どうせあんたが汚いまねでもしてアイクに言わせてるんでしょう。」

「カナメツ！」

「いいよ、アイク。うーん、それじゃあ、どうにかして認めて貰える方法はないかな？」

「……そうね。私と勝負して勝ったなら認めてあげてもいいわ。まあ無理でしょうけど。」

「荒っぽいのは止めときたいんだけどなあ……。何か別のことにしない？」

「はっ！ やっぱり逃げるのね！ これだから『忌み人』は……。ああ、そいえばあんたの母親も同じらしいわね。きつとあんたみたいな弱い奴ん」

「……やるよ。その勝負受ける。その代わりに、俺が勝ったら今の発言を取り消して……」

流志の表情が変わった。これまでの優しそうな面影はなく、冷たく、氷のようだ。瞳のなかの光も鋭い。

「……っ！ や、やる気になったようね。私が勝ったらアイクに二度と近づかないってことでいいでしょ。」

「……ああ。かまわないよ。」

こうして流志の新しい一年は波乱と共に始まることが決まった。

新学年スタート〜自己紹介〜 (後書き)

ご覧くださってありがとうございます。

決闘（前書き）

開いて頂きありがとうございます。
お楽しみ下さい。

決闘

「ファイア・キャノン
「火炎砲」

ドゴオオン

カナメが手をかざし呪文を唱えると、その手の前の空間に魔方陣が浮かび上がり、そこから紅蓮の炎が放たれる。中級魔法ということもあり威力はかなり強い。

流志が立っていた場所からはもうもうと黒い煙が立ち込め、地面には未だに火が残っている。煙のせいで中は確認できないが。もし流志に直撃していたなら、ただでは済まないはずだ。

「……もう終わり？ やっぱり思った通りね。『忌み人』なんて弱くて、意味のない存在ね。残念だけどアンタはもうアイクに近づかないで。」

カナメは勝利を確信しているのか、余裕の表情で姿の見えない流志に向けて言い放った。

「いやいや、まだ終わってないよ。後、戦いの最中に気を抜くのは絶対にやめた方がいいと思う。」

「ッ！」

煙の中から流志の声が聞こえた。その声には力があり、まだまだ戦えそうである。カナメは少しだけ驚いたような表情を見せた後、すぐに気を引き締め臨戦態勢にはいると、煙のほうを睨み付けた。伊達に二つ名をもってしているわけではない。

徐々に煙が晴れていき、中の様子が見えるようになる。するとそこには、ボロボロのコートをほおり、こともなく立っている流志の姿があった。

「俺はまだへばっちゃいない。戦いつてこんな甘いもんじゃあない、そうでしょ?」

「ッ！ なにを偉そうに！ 力も持たないクズのくせに！」

そして、両者は駆け出す。一方は、生まれながらにして多くのものを得ていた者。もう一方は生まれながらにして多くを奪われていた者。

雌雄はすでに決しているように見えるかもしれない。しかし、流志の顔には一片の曇りもない。彼は知っているのだ、いや、知りすぎている。闘い、というものを。

少し時間は遡る

「…………ふう。今日は大変な一日になりそうだなあ。ま、いつものことって言えば、いつものことだけだ。」

流志は自分以外誰もいない家のリビングのソファーに座り、今日の決闘の準備をしながらひとりゴチる。現在の時刻は七時二十分。土曜日ということもあり、平日のような喧騒も聞こえてくることもなく静かなものである。しかし、流志の家が静かなのはそれだけが理

由ではない。各々の用事のため、未だに家族の面々が帰ってきていないのだ。

(二日も一人で家にいるってのもなんだか寂しいけれど、以外とちよつどいいタイミングだったね。)

流志は今日の決闘のことを家族には知られたくはなかった。両親や姉、兄は流志の置かれてきた状況などを知っているためどうしても心配をかけてしまう。それは流志にとって避けたいことであった。

(これまでも十分すぎるほど色々と助けてもらってるからな。できるだけ心配はかけないようにしたいよ。)

「つと、そろそろ時間かな。」

必要なものを全て準備し終わり時計を見ると流志が予定していた出発の時間になっていた。

今一度装備などを点検し、使い込まれかなりボロボロになっている黒いフードつきのコートと、これまたボロボロな赤いフードつきのコートを二枚着込んだ。これは変な感じのオシャレなどではなく、今回カナメと闘うにあたっての作戦。流志にとっては基礎中の基礎だが、の一つである。

気負いや緊張の色など一切見せずに玄関のドアを開けると、流志は朝の陽光に眼を細めた。

昨日も通った『フラワーロード』を、昨日と少しだけ違う気持ちを抱きながら流志は歩く。もちろんかいそう学園に向かっているのだ。何故かという決闘場所は海創学園に備え付けてある多目的利用場 No.8 (多目的利用場は全部で十個あるため、それぞれに番号がふ

られている。流志からすれば多すぎだろって感じである。()でやることになっているからである。」

道の両サイドに咲いている花々を見ながら歩いているといつの間に校門前にたどり着いていた。なんとなく顔をあげるとそこには凜の姿があった。

「おはよう。凜。」

「おはようございます。流志くん。」

「凜はもうちょっと後に来てもよかったのに。今、九時だよ。俺とキャンベルさんの決闘の時間まで後一時間はあるよ。」

「何を言ってるのよ。流志くんのことだから一時間前には来るのは知ってたからね。この時間に合わせてきたの。一人で時間まで待つよりは話し相手がいたほうがいいでしょ?」

「もちろん。ありがとう、凜。」

「……うん。どういたしまして。」

穏やかな笑顔を浮かべ、お礼をする流志に少し顔を赤らめながら応える凜。

「それじゃあ、まあ、ここで話すのもなんだし、多目的利用場の観覧席にでも座ろうよ。」

「そうね。それがいいね。」

多目的利用場は校門から近いところにあり、あっという間に二人は着いた。

「……何回も言うようで悪いんだけど、やっぱりこれは無駄というか、やりすぎというか。これじゃどう見てもコロッセオだよ。多目的とか言いつつ明らかに用途が限られてくるよね。まあ、具体的には闘いとか決闘とかアレ（殺し合い）っばいことか……」

「……そうね。これに関しては私も上手いフォローのしかたが思いつかない。」

そう、この多目的利用場はどっからどう見てもコロッセオの形をしている。中央に広場があり、その広場を囲んですりばち状に観覧席が設けられているのだ。因みに収容人数は千五百人である。また、戦闘の余波が観客に及ぶことがないように、広場と観覧席との間には防護膜が張られており、様々な衝撃だけでなく有害なガスの類いもシャットアウトできる構造になっている。これをコロッセオと言わずになんと言っのだろう。

考えても仕方ないことだと二人は諦め、観覧席に座った。

「ねえ、流志くん。今日の決闘大丈夫なの。いや、流志くんが強いってことは知ってるよ。でも、相手はあのキャンベルさんだし、流志くんが大ケガするところとかは見たくないよ……」

人の傷つく姿など見たい訳がない。それが好きな人であればなおさらだ。

「大丈夫だよ。こんなの今まで何度もあったからね。いや、これよりひどい状況だって数えきれないくらいあったさ。でも、ありがとね、凜。心配してくれるのは本当に嬉しいよ。」

(まあでも、楽な展開になることはないだろうけどね。)

それから二人はこれからの学校のことや、春休みの間に起こった出来事などを喋りあった。これから決闘を行う者とは思えない和やかさだ。

そんなこんなで時刻は午前十時。予定の時間となった。すると入り口の方から声らしきものが聞こえてきた。どうやら、アイク一行　もちろん今日の相手であるカナメもいる　が到着したようだ。流志と凜は話を止め、広場の中央に移動した。しばらくするとアイク一行がやって来るのが見えた。

一行の表情は様々で、カナメは不機嫌さを隠そうともせず流志を睨み、他の三人のハーレムメンバーは何だか居心地の悪そうな顔をしている。アイクは本当にすまなそうな顔をしながら流志のほうをみるが、それによってカナメがまた不機嫌になってしまったため、困り果てている様子だ。

「おはよう。アイク、鬼瓦さん、イスピニアさん、ミミさん、それにキャンベルさんも。」

「ああ、おはよう流志。すまねえな、こんなことになっちまって。俺もカナメを説得しようとしたんだが……」

「アイク！こんな奴に謝る必要なんてないわよ！」

今の言葉に凜は拳を握りしめ、カナメを睨む。カナメは一瞬ひるんだがなんとか気を持ち直して、凜ではなく流志を睨む。そんな中流志とアイクは

(本当にすまん。)

(いや、大丈夫だよ。アイクがキャンベルさんと仲良くなったのは最近みたいだし、あんまり俺の事を認めてくれないのも仕方ないさ。まあ少しでも認めてもらえるように頑張る。それに、今回のことは母さんのことでカツとなった俺も悪いしね。)

視線だけで会話をしていた。親友だからこそできる芸当である。

「さて、そろそろ時間だし、やりましようか。あんまり遅くなって誰かに見られるのも嫌だしね。」

流志が決闘の日時を休みの日の午前中にしたのは人目につくのを避けるためだ。流志にとって手の内を簡単にさらすのは死活問題にながるのだ。

流志とカナメを広場に残し残りのメンバーは観覧席へ移動した。これから決闘が始まるのだ。

「ルールはもうわかってると思うけど、一応確認。基本は何でもあり。魔法でも神力でも神通力でも使えるものなら何でもいい。後、このコロッセオは生死に関わるような攻撃は自動的に緩和するようになってるから、ある程度の攻撃は大丈夫。でもあんまり強力すぎると緩和しきれないからさすがに止めてね。」

「ハッ 心配ないわ。アンタなんかそんな強いの使うまでもないわ。」

「そう。じゃあ、やろうか。」

二人は距離をとり構える。

二人の決闘に開始の合図はなく、一呼吸の間を置くと流志はカナメに向かい走る。カナメはその場を動かさず手をかざすと静かな声で呪文を唱える。

『フレイムキャノン
火炎砲』

そして場面は冒頭に戻る

カナメは走りながら魔法により作られた火の玉を流志に向かい次々放つ。流志はそれらをかわしながら走る。しかし火の玉の数は非常に多く、かわしきれなかったものが肩や脇腹などにかすが流志はまったく怯むことなく突き進む。

カナメは流志のそんな様子に一瞬困惑しかけたが、流志はすでに目の前に迫ってきているため気を持ち直す。そして流志を向かえ撃つために魔法により拳に炎を纏わせる。

対する流志の手に得物はない。もちろん魔法などを使えるわけもないので、まさに素手である。

流志とカナメが激突する。

カナメは炎を纏った拳を流志にむかい突きだす。流志は右手に持った短剣（ ）でその拳を受け止めとた。そして拳の勢いを受け流し、短剣を横一闪。バランスが崩されたカナメは踏み込んでいた足にかなりの力を込め、無理矢理バックステップをして流志の一撃をかわす。そしてそのまま距離を十分にとり、息を整えながら一連の流志との流れを考える。

(火の玉を受けても何もなかったかのように走っていたし、武器もどこからともなく取り出した。それに『フレイムナックル火拳』の拳圧にも耐えるつてことは……)

「……そのボロボロの赤いコートと黒いコート、対炎効果付きやつに、対衝撃効果付きのやつね？」

「うん、そうだよ。そりゃあ、キャンベルさんみたいな強力な火炎魔法の使い手が相手なんだから、これぐらい当然でしょ。さつき火炎砲を受けても立っていられたのもこのコートのおかげ。まあ、直撃してたらさすがにヤバかったけどね。」

「で、そのコートを生かした戦法が暗器使ってわけね。意外と考えてるのね。」

「まあね。俺が闘うにはそれぐらいしないと。」

「ハッ！ 確かにそうね！ じゃあこれならどう！？ 弱者さん！

ファイアーボール
『火柱』」

途端に流志の周りを囲うように炎が立ち上がる。流志は一瞬でカナメの意図を悟り、コートの中に隠し持っているカバンから『オーツ―草』を取り出すと口に含んだ。

カナメが狙ったのは、炎により酸素を消費させることによる窒息だ。しかし、流志にとってこのような攻撃方法など予想の範疇にすぎず、もちろん対策もしている。それがこの、通常の何百倍もの酸素を常に放出する『オーツ―草』である。

流志がしばらくじっとしているとカナメが魔法を解く。

「へえ、これも対応できるんだ。『忌み人』のわりにはやるじゃん。」

（普通俺が動けない間に次の攻撃の準備ぐらいするはずなんだけど……。やっぱり優位からくる余裕かなあ。）

カナメがなんのアクションもせずに自分を観察するように見ていることに流志は内心でため息をついた。流志からしてみればカナメの行動はありえないことである。決闘であれ闘争であれ、闘いの最中に気を抜き、次の攻撃のチャンスを潰すというのはかなり愚かなことなのだ。

（まあ、俺の策を成功させるにはちょうどいいから気にしないでいこうっと。）

思考をそこで打ちきり、再び意識を闘うことだけに集中させていく。その変化を感じとったカナメもまた表情を真剣なものに変える。

闘いはまだ始まったばかり。本番はここからだ。

「ねえねえ、この前からカナメちゃんが言ってる『忌み人』って何のことなの？」

流志とカナメの攻防を見ながらミミは疑問に思っていたことを周りの皆に尋ねた。

「……『忌み人』というのは、災厄の象徴または世界からの呪いを

受けた者と呼ばれている人々のことですわ。これは一般常識のはずなのですが。」

「災厄の象徴？ 世界からの呪い？ りゅーくんが何か悪いことしたってこと？」

「いえ、そういうことではありませんわ。そうですね、この機会に「一応『忌み人』についてお教えしましょうか。」

「お願いします！」

「わかりました。まず、ミミさんもご存じの通りこの世界は五百年前に数多くの世界が融合し、一つになることによって誕生しました。そして、その過程で大きな悲劇が起こってしまった。これは分かりますね？ ミミさん？」

「うん、分かるよ。各世界の人々が白い光に包まれて消えてしまっただってやつでしょ。それで各世界の人口が四分の一ずつぐらいになつて、それが合わさって今の世界になつたんだよね。」

「その通りです。世界を統合するにあつての人口調節だったとか、我々の先祖が世界間を渡りすぎてしまった反動、もしくは何か大きな存在からの罰ではないかなど、いろいろな憶測が立てられていますが、今のところ確かな事実は分かっていません。」

「だけど、それと『忌み人』にどんな関係があるの？」

さっぱり意味がわからないといった調子で首を傾げるミミ。

「実は、というか、これも一般常識ですが、この一連の出来事には

続きがありますの。」

「続き？」

「ええ、世界が徐徐に交わっていき、完璧に一つとなった後に現れ始めたのですわ。『忌み人』と言われる人々が。」

「現れ始めた？ どこから出てきたってこと？」

「少し違いますわ。どこから現れたのではなく『忌み人』の特徴である白髪、白眼をもった子供が生まれるようになったのです。それも、人間族、魔族、神族などの種族や血統に関係なくランダムに突然に。」

「ああ、どうりで時々、白髪や白眼の人を見かけるのかあ。ボク今までファッションなのかなって思ってたよ。でも、どうしてその白髪、白眼ってだけで『忌み人』なんて呼ばれてるの？ それにカナメちゃんとかクラスの皆とかなんだかりユウくんのことあんまり良く思っていないみたいだけど？」

「それは……」

「それは、あの白髪と白眼が昔皆が消えていった時の白い光に似ているってことと、あの特徴を持つ人々は皆、能力や才能が格段になり、いや奪われている。私たちの魔法や神力なんかの力もあの悲劇以降かなり制限されているみたいけど、流志くんたちのソレはまったくの別物。魔法や神力は種族の問題とかもあるけど、それを差し引いてもおかしなくらい才能がないの。それに人間族 流志くん の種族 の特徴である科学ですら上手くつかえないの。そのようなことから世界からの呪いだとか災厄の象徴って呼ばれている。だから

ら、皆気味悪がったり、本当に最悪な人たちはいじめの対照なんか
にしているのよ……まったく、ふざけた話よね。流志くんのこと何
にも知らないのに『忌み人』というだけで判断するなんて 本当
にふざけているわ。」

「……」

非常に言い辛そうにしていたリリアナに代わって答えたのは凜だっ
た。

しかし、その答えの言葉に返事を返すことができる者はいなかった。
凜の表情と声があまりにも冷たかったからである。

「おい、凜。落ち着けよ。」

重い空気を振り払うために、アイクは凜に声をかける。

「…ああ、ごめんなさい。皆のことじゃないから気にしないで。」

アイクの一言で我に帰った凜は表情を元に戻して、纏っていた冷た
いオーラも霧散させた。

（やっぱりいつになっても馴れないですわね、神谷さんの出すオー
ラには。これがアイク様にも並ぶとも噂される『戦女神』の強さと
いうことですか。私も湊さんもミミさんもかなりの実力者のはずで
すが言葉も出せなくなってしまっなんて……）

リリアナは背中を流れる冷たい汗を感じながら、内心で呟いた。他
の二人も同じ様子で、額の汗をぬぐっていた。

「燃える 燃える 我が根源の炎よ。我が道を阻む敵を焼け。象るは槍。貫くは意思」

『紅蓮の麗槍』
クリムゾンランス

リリアナが場の空気が落ち着いたのもつかの間。今度は流志とカナメの戦況に変化が起きた。

「カナメの奴、十八番の上級魔法をだしてきたぞ。これは、そろそろ勝負をかけるつもりだろう。まあ、東雲に限ってカナメの十八番を見て焦るってことはないだろうけどな。」

「そうだな。流志のことだから切り札の三つか四つは隠し持っているだろうさ。」

湊とアイクとのやり取りを最後に、五人は会話を止め、意識を流志とカナメの勝負へと集中させた。

『紅蓮の麗槍』
クリムゾンランス

カナメが呪文を唱え終わると、その手にはどこまでも紅く、美しい槍が握られている。

「それが噂に聞く紅蓮の麗槍か。中々にヤバそうだね。」

カナメは槍を構えると一直線に流志へと向かって駆け出した。カナメと流志との距離は十リールは離れているため、すぐに激突することはないだろう。普通なら。

（ これってキャンベルさん得意のアレだろうね。ってことは ）

ドンっという音が聞こえた瞬間、カナメの姿が消えた。

流志は思考をとっさに打ち切ると、思いきり横に飛んだ。ゴロゴロと地面を転がり、回転の勢いを利用して体勢を立て直す。そして、流志がつい先程までいた空間には、カナメが槍を突きだしていた。見ると、槍の石突きの方から煙が上がっている。先程の音は炎が噴き出した音だったようだ。

「あら、避けきれたのね。一撃で決めるつもりだったんだけど。」

「まあ、一応君の十八番ぐらいは調べてあるからね。さすがに知らなかったら今ので詰んでたよ。」

「でも、私の有利は変わらないわね。アンタにはこの速さと熱量に耐えられる術がないはずだから。」

『紅蓮の麗槍』 カナメの得意魔法である。最大の特徴はその火力である。穂先から石突きまで紅いその槍は、炎を圧縮してできたものであり、これまでに使用していた魔法の何倍もの火力があるのだ。そして、圧縮された炎を噴射させることによりジェット機のようなスピードを生み出している。また、他の部分からの開放も可能であり、穂先に触れれば焼き切られてしまう。

「それはどうかなっ！」

流志は言葉と同時に短剣を投げる。さらに自分もカナメに向かって

走り出す。

投げた短剣をカナメが弾いた隙について追い討ちをかける考えだが、しかし、カナメも若手のホープと呼ばれる程の実力者。流志の考えをすぐに理解することができた。

カナメは飛んでくる短剣を薙ぎ払うと、勢いそのままに回転する。そのままでは流志のタイミングの方が速いはずだが、カナメは穂先の横から炎を噴射し、加速。流志が間合いに入る、まさにその瞬間に、一閃を叩き込んだ。

とっさに新たな短剣を取りだしガードするもその一撃は重く、体勢が悪かったのも相まってなす術もなく吹き飛ばされる。

「ガハッ　ゴホッ」

カナメの一撃は非常に強力だったため、対衝撃コートをもってしても衝撃を緩和しきなかった。内蔵にもダメージがあったらしく、かなりの量の血を吐く。

（格闘も強い魔法使って反則でしょ。いや、魔法の手助けもあったのことだろうけど。……………ただ、武器を使い物にならなくしてくれるのは好都合）　（かな。）

どうやらカナメの槍の熱量にやられたらしい。短剣は刃の部分がかなり溶けていて何かを切るということはできそうにない有り様だ。

「何を黙りこくってるの？　実力差を感じて怖じ気づいた？　今からでも降参してもいいのよ。」

流志が息を整えながら思索していると、カナメが挑発をしてくる。

(後、やっぱりあの態度もラッキーだな。)

流志は原型のなくなった己の短剣を地面に投げて突き立てる()
と、またもやいつの間にか武器 今度は先程の短剣より少し長い剣
をとりだすと、カナメに切りかかる。だが、『紅蓮の麗槍』によ
り、一撃の速さと熱量が尋常じゃないカナメに届くことはなく、ま
た吹き飛ばされる。

流志は血を吐きながらも立ち上がり、やはり使い物ならなくされた
剣を地面に突き立てると、今度は旋回しながらカナメを攻める。
しかし、スペックの違いは大きく、いとも簡単に先手を打たれ、重
い一撃をもらってしまふ。

何度かこの光景が繰り返された。

(ハア……ハア……準備はできた。後は仕上げだ。)

カナメの攻撃を何度も受けた流志は無数の傷をつくっており、正直
いって息を吸い込むだけで体が悲鳴をあげ、闘いたくないと訴えか
けてくる。それでもなんとか踏んばり、今回カナメに勝つために用
意した策の仕上げのために剣を構える。この剣には今までと違い、
何か古代文字のようなものが腹に書き込まれている。

流志は剣を振りかざしながらカナメに迫る。そしてそのまま振り下
ろす、と思いきや逆手に持ちかえると地面に突き刺す。

「我 呪われし者。悲しき病を持つ者。今 我は望まん。等しき苦
痛を彼の者に」

「へえ。それが切り札？　じゃあ、こんなのはどう？
爆破トフレア」

「座標ポイン」

カナメは流志の行動に驚くどころか、余裕そうに笑う。そして呪文を唱える。すると、流志がこれまでに突き立ててきた、六つの短剣や剣が爆破された。

「アンタがコレを狙ってたのは分かったわ。でも雑な策ね。だっ
ておかしいでしょ。わざわざ武器を地面に突き立てるなんて。しか
も六芒星を描くように剣を配置してるし。これじゃあ気づいてくれ
って言ってるようなものね。残念でした。」

「　与えんことを。今　我は望まん。等しき涙を彼の者の瞳に
」

そんな嘲笑になど耳を傾けず流志は言葉を紡ぎ続ける。そんな様子
に嫌なものを感じ、カナメは笑みを消して流志をしとめにかかる。

「　与えんことを。今　我が血を持って望みを果たさん　」

カナメの槍が眼前に迫る。

だが、もう遅い

『平等に優しい世界』テンドーワールド

瞬間、カナメの手から槍が消える。

カナメの顔が驚愕に染まるのが分かる。その隙を見逃すはずもなく、
流志は剣を振るう。

カナメは回避行動をとるも、動揺によりかわしきれず、腕を斬られ
た。

「くッ！ どういうことよ！？ 媒体は破壊したはず！！」

斬られた腕を押さえて叫ぶ。

「媒体って言うってことは、呪術ってことにも気づいてたんだ。すごいな。」

「そんなことはどうでもいいのよ！ 私が聞いているのは、どうして発動したかってことよ！」

流志は落ち着いた声音で答える。

「キャンベルさんは剣が媒体だと思ったんだよね？」

「そうよ！」

「それが間違い。言葉を返すようだけどおかしいと思わなかった？ 剣が媒体だとしたらあんなに明らさまにするのはありえない。それに思い出してみても。俺は吹き飛ばされるたびに、剣を突き立てる以外に何かしてたでしょ？」

「ッ！ まさかッ！あの吐血は！」

「そういうこと。今回の媒体は剣ではなく、血だったんだ。自分で傷つけたら怪しまれるから、キャンベルさんの攻撃を利用させてもらったよ。まあ、ダメージはかなりくらったんだけど。」

「くッ！」

カナメは流志の策にまんまとはめられたことに悔しさを感じると同時に、その鮮やかさに舌を巻いていた。

血を自然に流すためにカナメの攻撃を利用し、さらに気取られないようにするために剣を用意して血から意識をそらしたのだ。

そして、さらに驚くこととなる。

「後、キャンベルさんは一つミスをしたね。俺が何かしていると気づいたなら、すぐに潰すべきだった。泳がし最後に策を看破して動揺させようとしたのだろうけど、それを俺が気づいてるかどうかにも気をつかわないと」

「ッ！」

これにはカナメも声も出せず、ただただ驚く。

（嘘でしょ！！ 私の考えも見越して、それさえも利用したって
いうの！？）

「ああ、そしてこの呪いの効果は、大体分かっているとと思うけど、能力や魔法といった特別な力を一定時間封じることだよ。キャンベルさんの強さだと持って七分だから、後四分ぐらいかな。」

流志は目を細める。

「じゃあ、時間もないし行くよ！」

流志はカナメに斬りかかる。これで勝負は決まったかと思われたが、今度は流志が驚くこととなる。

「私にも切り札はあるのよ！」

カナメは刀身が光でできている剣で、一撃を受け止めていたのだ。

「ッ！ 魔法剣か！」

「そう、魔力貯蔵式のね！」

流志の呪いはカナメの力を封じたのであり、道具などを使えなくしたわけではない。だから事前に準備されていた武器などには対応しきれないのだ。

二人は斬りあう。状況的には五分に見えるが、実際は流志が圧倒的に不利だ。

カナメはダメージというダメージはない。対する流志はすでにギリギリだ。

徐々に流志が押され始める。焦った流志は二つの小さな玉を地面に投げつけた。すると玉は砕け散り、とてつもない悪臭がたちこめる。

「うッ！ 何コレ！」

あまりの臭いにカナメは一旦距離をとる。

「臭い玉ってやつだよ。」

流志は臭いが立ち込めている間は攻められることはないと思っているのか。その場で立ち、体を休ませている。

(ハッ コイツもなんだかんだで甘いじゃない！ 私がこの程度でチャンスを逃すとおもっているの!?)

魔法剣を振りかざし、とどめの一撃をみまうために踏み込む。それはまるで先程の再現のよう。

(この嫌な感じは)

今一度眼前の敵を見る。そこには瞳に自信の光をたたえ、ライターを持つている流志がいた。

(どうして二つも玉を投げた？ どうして煙玉ではなく臭い玉を？ どうしてその場を動かない？ そしてあのライターは まさか ツー!!！)

足に力を込め踏みとどまろうとするが、間に合わない。

流志はライターのふたを開け、火をつけた。

ドゴオン!!

二人を中心にして爆発が起こる。

しばらくの沈黙の後、煙が晴れて見えたのは、悠然とたつ流志と少し離れたところで横たわるカナメの姿だった。

決闘（後書き）

ご覧くださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1917y/>

ゴールデンルーザー ~優しい世界~

2011年12月28日02時49分発行